

の後の学会発表の時、平野さんに話しかけてみるとちょっと機嫌が悪そうだった。無理もない、地元にも関係する面白い硬い虫の発見だったから悔しかったのだろう。申し訳ない気分になった。でもその直後に、亀澤さんからベニヨツボシの標本を貰ったとたん機嫌がころっと直り、満面の笑顔になった。ああなんだ標本欲しかっただけだったのかも、と思った。いつも人懐っこい笑顔を見せてくれる人だった。

平野さんの偉大な業績はたくさんある。前述の本もそうだし、雑甲虫をメジャーにしたことも偉大な業績だと思う。それ以上に、何か記録する際に多くの情報をネット等で入手しそれを網羅的にわかりやすく解説するスタイル、それに尽きるように私は思う。彼の上の世代にも多くの偉大なアマチュア研究者がいて様々な業績が残されているが、いわゆる今風の研究スタイルこそが彼の偉大

な業績だったのではないかなと思う。
ご冥福をお祈り申し上げます。



平野さんはいつもみんなに頼られていた（2011年の大会の同定会にて、中央が平野さん）

地域ファウナ分科会 ―平野幸彦氏を偲んで―

藤本博文

〒760-0005 高松市宮脇町 1-17-4

平野幸彦さんが亡くなられた。最後にお会いしたのは2019年1月20日、神奈川県立生命の星・地球博物館で行われた神奈川昆虫談話会の例会（神奈川県昆虫誌2018出版記念シンポジウム）だった。平野さんは闘病中だったが、奇跡的に病状が良くなられたとのことで車椅子で出席された。元気そうに手を振り登場されたが、そのお顔はすっかり痩せてしまわれていた。お会いできて嬉しいと思う一方で「これが最後になるかもしれない」という不安も頭をよぎった。その日以来不謹慎ではあるが、遠からず来るであろう、日に向けての心の準備も始めていた。それでも訃報に接した際の衝撃は想像以上で、3ヶ月が経った今も決して小さくない穴が心に開いたままだ。

平野さんの存在を初めて知ったのは1990年代、大学生の時である。神奈川県産甲虫の記録を逐一整理、更新されている姿に、尊敬と憧れの念を抱いていた。月刊むしの「県別に甲虫は何種いるか（平野、1987）」や「地域別に甲虫は何種いるか（平野、1995）」、あるいは神奈川虫報の「神奈川県の甲虫は何種生息しているか（平野、1992）」等の記事を

コピーしてはバインダーに綴じ、擦り切れるくらい何度も読み返したものであった。当時の私にとって、平野さんは雲上人の一人だった。

思えば、平野さんと初めてお会いしたのも小田原の神奈川県立博物館だった。1997年11月に開催された日本鞘翅学会（本会の前身のひとつ）の総会である。当時の私は大学院生活に行き詰まり、自分が何をしたいのかを見失いかけていたが「地域に生物種は何種いるのか」というテーマには興味があり、福岡市の離島、能古島の甲虫相調査を続けていた。この時は「地域ファウナ分科会」というものがあり、私はそれに参加した。

会は、まず平野さんが神奈川県の甲虫相解明の現状を紹介し、その後、参加者が各地のファウナ調査の現状を自由に話す流れで行われた。私も、熱にうなされた様に手を挙げ、たどたどしくも能古島の調査の話をしたはずなのだが、極度に緊張していたため内容は覚えていない。おそらく支離滅裂なものだったと想像する。しかしそんな私を、平野さんをはじめ参加されていた方々は、にこやかに優しく受け入れてくれた。何にもなれずに消

